

元村地なるにより、安江木町と同じく安江鍛冶町とは呼びたるならん。但し利光卿の判書に、既に鍛冶町と載せ給へり。此の判書は、寛永元年なりと見ゆれば、國初以來鍛冶町と稱し、鍛冶共此の地にて邸地を賜はり、爰に居住せしゆゑ、町名に呼びたるものなり。

○鍛冶來歴

抑、吾が皇朝鍛冶の濫觴を考ふるに、日本紀神代卷に、以石凝姥爲治工。採天香山之金。以作日矛。と見ゆ、古事記には、求鍛人天津麻羅。而科伊斯許理度賣命。令作鏡。とありて、鍛人をカヌチとよめり。日本靈異記にも鍛をカチスルとあり。和名抄に、鍛冶段野。二音四聲。字苑云。鍛打金鐵爲器也。冶燒鐵銷鑠也。といひ、又俗云鍛冶訛也。とあり。下學集にも、鍛冶打鐵造器者也。日本之俗。以此二字呼作假治音。大誤也。蓋以字形相似歟。字已別。音亦別也。可辨之。といへり。和訓栞に云ふ。鍛工をかちといふは、かたしの反語。またかぬちの略語なり。靈異記に、かちするとよめり。鍛冶と書くは、倭名抄にいへる鍛冶の文字に就いての説なり。新撰六帖に、かちやなる太刀のやき

ばとよめりといへり。さて古語拾遺に、至于磯城瑞垣朝。漸畏神威。同殿不安。故更令齋部氏率石凝姥神裔天目一箇神裔二氏。更鑄鏡造劍。以爲護神御璽。とあるは、崇神天皇の御世にて、彼の二神は鍛冶鑄物師の祖神といふべし。抑、刀劍鍛冶の高名なる、古今多しといへども、後成恩寺關白兼良公の尺素往來には、遣刀・長刀及太刀・腰刀者、昔在月山天國、雲同以後得其名鍛冶雖有數百人、於其中信房・舞草・行平・定秀・三條小鍛冶宗近。後鳥羽院番鍛冶御製作者、以菊爲銘。粟田口者、藤林・國吉・吉光・國綱等。來者國行・國俊等。此外者一文字・千手院・僧了戒有計留。進藤五・仲次郎・五郎入道正宗・備前三郎國宗・孫子四郎・文珠四郎并金剛兵衛等、一代聞達者候、皆獲干將莫耶吹毛太阿之佳聲。不異不動利劍者歟云々。とあり。また應仁別記に、京都念劇に依つて、御臺様坂本へ御忍あり。御暇乞御對面、御一献あり。御出立御膚に萌黃の練貫、上にかちの御小袖、赤地の端子の御袴、御劍御腰物善鬼・包平・藤四郎・小鍛冶・鳩作等被持けり。とありて、善鬼・包平以下皆足利家重代の寶劍なるべし。本阿彌の鑑定書に、古來最上の位

と究めたるは、吉光・正宗・義弘の三作、小鍛冶宗近は三作に引繼ぎたる位也と。依りて今勘考するに、吾が舊藩封内加賀・能登・越中の三ヶ國は勿論、北陸道にての鍛冶の鼻祖は、越中郷義弘・佐伯則重の兩鍛冶をばいへり。義弘、則重兩鍛冶共に相州鎌倉正宗の高弟にて、義弘は越中國下新川郡松倉郷松倉村に住す。故に郷右馬允と號し、後醍醐天皇の御世正中二年に廿七歳にて歿すとぞ。或は云ふ。義弘は松倉一郷を領せし貴族なりしが、刀劍を鍛ふる事を好み、相州正宗の門に入りて、水火の傳を受け、古今の名人と成るといへども、刀劍に銘せざるは鍛冶家に非ざる故なりといへり。原本信長記天正九年三月の條に、越中國の御敵河田豊前、ごうの刀作りたる鍛冶之在所松藏といふ所に楯籠とあり、刀劍口傳書に云ふ。或人郷義弘の事を本阿彌に問ひ、郷の刀劍は皆無銘物なりと。いかゞして無銘物を郷と極め給ふや。答へて曰く、不審尤なり。凡吾が皇朝古今の名人といふは、粟田口吉光と相州正宗との兩人なり。然るに藤四郎吉光は其の作靜閑にて、五郎入道正宗は其の作烈しく、今一人名人ありて鍛方靜かならず騒しからず。其の作

吉光・正宗に劣らず。世に郷義弘と云ふ名人ある事、普く傳聞すといへども、無銘なるが故に夫れなりと辨じがたし。されど彼の無銘物を閱するに、位は勿論、燒刃の光景等の手際までも、彼の兩作に聊か劣る事なく、尤自餘の鍛冶共の十に一つも及びがたき處なり。爰を以て無銘なれど、郷なりと極むるなりと云々。又佐伯則重は、古刀銘盡に載せたる刀銘に、越中國婦負郡御服住佐伯則重嘉曆三年七月日とあり。刀劍奇賞に云ふ。越中の則重は正宗の弟子にて、五郎次郎とも又新五郎とも呼べり。伏見天皇の御世正應三年の生にて、元應・嘉曆の頃婦負郡吳服郷に住し、佐伯則重と云ふ。傳に云ふ。則重修行滿ちて、本國越中吳服郷へ歸る時、相弟子の情を思ひて、相州より貞宗送り來る。則重則ち貞宗に謂ひて曰く、邊鄙の輩拙くも家業に凝らざれば、猿が人眞似なり。先生姑く勞を厭うて、水火の位を授けしめ給へと乞ひける故に、貞宗彼の需に應じ、少しく爰に足を止むと云々。則重の子眞景は則重より相傳し、觀應の頃加州へ移り岩瀧と云ふ處に居住す。永徳・應永の頃まで存命すといへり。義弘・則重は實に北國にての鍛冶の鼻